



紙本着色日蓮聖人涅槃図 身延山久遠寺身延文庫蔵

解説 熊林 王 秀 是 臣 晋

この日蓮聖人涅槃図は江戸時代に製作された極彩色の超大幅の画である。縦三四〇センチ、横二五〇センチの法量をもち、表装された全体は縦四五〇センチ、横三〇〇センチの大幅である。作者は不明であるが、これだけの肉筆大作の日蓮聖人涅槃図はきわめて珍しく、おそらく二つとないと思われる。

釈尊がクシナガラ（拘尸那揭羅）のシャーラ（沙羅）樹のもとで涅槃に入った光景を図示したものを釈尊涅槃図というが、この日蓮聖人涅槃図がそれにならって作成されたことは確かと思われる。しかし単に模して、というよりはその作成の意図はもう少し深いところに求められよう。

日蓮聖人は、七百年の昔、身延山を出られ、十月十三日の朝、その六十年におよぶ波瀾の生涯を武蔵国池上宗仲の館で静かに閉じられたが、聖人が晩年の九か年間を過ごされて「いづくにて死に候とも、はか（墓）をばみのぶさわ（澤）にせさせ候べく候。」（波木井殿御報）と遺言された霊地身延山を、釈尊説法八か年の聖地靈鷲山に対比し、釈尊の入涅槃されたクシナガラを武蔵国池上郷になぞらえる信仰がある。クシナガラは靈鷲山の東北にあたるとされ、池上は大よそ身延山の良（東北）に位置している。日蓮聖人の御入滅に際しての門下の人々の悲嘆の情は、釈尊の入涅槃のときに勝るとも劣らないものであったろう。日蓮聖人への止みがたい讃仰と哀惜追慕の念こそ、釈尊涅槃図にならって日蓮聖人涅槃図を作成させた要因であろう。

本図は吹抜屋台（天井・屋根を除いて、斜め上方から見おろすように屋内のようすを描く）の技法が用いられ、大幅であるだけに細部まで明瞭に描かれている。人物が多彩であり、その一々に人名があてられている。

臨滅時の御本尊が懸けられ、机上には立像の釈迦仏が安置され、御弟子方は聖人の御枕辺を囲んで一心に御経を誦誦し、在家の信者たちは悲しみに身をよじらせて、七百年の昔の日蓮聖人御入滅の厳肅な有様を今に伝えている。

身延山では毎年十月十一、十二、十三日の御会式に、本図を棲神閣祖師堂に懸け報恩の法要を営むのである。

七百遠忌を記念して、原図の約三分の一に縮小された複製品が作られ、身延山大本堂建立寄附丹誠の寺院方に頒たれている。